

さまざまの魂

「分析批評」による「子守り歌」

中村裕子

「風俗産業で生きる女の子達は、ある何かを象徴している」⁽¹⁾

はじめに

村上龍の短編小説「子守り歌」の主人公は、売春をする「女の子」である。「売春が登場する小説をひとまとめにして、仮に『売春小説』というジャンルをつくって」⁽²⁾ みるなら、この小説も「売春小説」に入る。

「子守り歌」には、「彷徨する魂」、「男女関係」と「男と女の社会的ポジション」が描かれている。だが、この作品の主人公は強烈な自己主張をするわけではなく、実際どこかに存在するような「女の子」

である。さらに、「病院」に入っている女の子が登場し、現実には有り得ないような場面が展開する。リアリティとファンタジーが混然一体で、非常に不思議な作品である。

そこで、今回は「子守り歌」の「分析批評」⁽³⁾ を試みたい。

1 「子守り歌」のテーマ

「子守り歌」の底流に流れる思想、すなわちテーマは、先ほど挙げた「彷徨する魂」、「男女関係」、そして「男と女の社会的ポジション」である。

以下の章からは、この三つのテーマが作品の中でどのように表現されているかを検証したい。

2 彷徨する魂—あらずじ

それでは、「子守り歌」のあらずじを紹介したい。分かりやすいように、全体を七つの章に分けてみよう。

一章は、主人公である「あたし」の家の場面からスタートする。お皿洗いをしていた「あたし」は、昔付き合っていた音楽家の声がテレビから聞こえてきて、うろたえてしまった。音楽家は、自慢気に自分の家族について話している。「あたし」と同棲しているトウルは、テレビを見ながらマーマレードを塗った焼いていないパンを頬張っていた。「あたし」は、「どうしてあたしがこういう目にあわなければいけないのだろう、あの男はきれいな海岸や雪の上で家族と遊んでいるのにあたしの横には立て膝をしているトウルがいるだけだ……」⁽⁴⁾と思ったのだった。

「あたし」が、事務所まで音楽家に会いに行こうと考えていたのが二章である。そうしていると、「あたし」に初めてシャンペンや生牡蠣をご馳走してくれたり、やさしく髪を撫でてくれた音楽家が思い出

された。「あたし」にとって、音楽家は「大切な人だった」⁽⁵⁾のである。

三章は、電話があつてラブホテルへ行った「あたし」がお客に「犯され」、死にたくなつた場面である。けれども、音楽家の家に行こうと決心したら心が軽くなつたのだった。

ウインナーソーセージと卵焼きとキュウリの古漬けのお弁当を持ち、「あたし」が音楽家の家に出かけたのが四章である。彼の家は、郊外の高級住宅街にあつた。

五章は、「あたし」が公園でお弁当を食べている場面である。すると、年をとつた女の人がオペラを歌いながら現れた。女の人は「あたし」を、自分の夫の昔の愛人だと勘違いしている。彼女は、「あたし」のお弁当に入っている卵焼きを「マロンスフレ」や「小海老のキール」、或いは「いんげん豆と鹿の pate」かと思つたと言つた。そして、突然泥で汚れた左親指を「あたし」の目の前に突き出し、「舐めなさい」⁽⁶⁾、と命令したのである。「あたし」がびつくりして顔を遠ざけると、女の人は「わたし」を「淫売」と叫んだのだった。若い女が現れ、女の人の腕を掴んで連れて行つた。

「あたし」は音楽家の家に着き、ノックをした。しかし応答はなく、二階の窓が開いていたので、どうにかしてベランダに上がろうとした。犬小屋の屋根に足をかけたら屋根が壊れ、「あたし」は犬に足を咬まれてしまった。恐怖と痛みで泣いていると、警官がやってきて「あたし」を掴まえた。これが六章である。

七章ではオペラを歌った女の人が再び現れ、「あたし」を警官から解放してくれた。「あたし」と女の人は一緒に公園へ行くと、女の人は子守り歌を歌った。すると「あたし」は音楽家を思い出し、歌もあまりにも美しかったので、涙がとめどなく溢れたのだった。

3 男と女の関係―視点

「子守り歌」では、最初から最後まで「あたし」の目から全てが語られている。しかも、「あたし」は「あたし」の心の中しか話さない。この作品は、一人称限定視点で書かれているのである。

「思う」ということばが使われている箇所を、本分からいくつか抜き出してみよう。

「……早くその音楽家がテレビから消えてくれないかなと思つたが……」（二二四頁）

「……尻を突き出す格好で犯されながらこのままでは自分が惨めだと思つて死にたくなつた。」（二二八頁）

「……音楽家の家は……広い道路と広い道路が交差する角にあつてあたしはまるでよく高原とかスキー場にあるホテルのようだと思つた。」（一三四頁）

このように、「あたし」が「あたし」の心の中しか語らない限定視点によつて、テーマの一つである「男女関係」が効果的に浮かび上がってくる。音楽家は、「あたし」に優しく微笑んでくれたり、食事や旅行に連れていってくれた。「あたし」一人にとつてのみ、音楽家は「大切な人」だったのである。音楽家にとつて、「あたし」が「大切な人」だったかどうかは一切語られていない。「……一人で食つたり飲んだりするのが嫌い」的な音楽家は、そのために「あたし」と会つていたと考えられる。「あたし」が音楽家を想っているほど、音楽家は「あたし」を想っていない。二人はこれまでも、そしてこれからも、すれ違う「男女関係」にある。

4 男と女の社会的ポジション—イメージ語

イメージ語とは、『雨』や『傷跡』などのように、具体的に絵になることば（映像語）や、耳に聞こえる言葉（音響語）、肌で分かることば（体感語）、においが分かることば（嗅覚語）、味が分かることば（味覚語）など、五感によって理解されることばの「使い方」⁽⁸⁾を指す。作品からイメージ語をピックアップすることによって、テーマがより理解可能となる。

「子守り歌」のイメージ語は、非常に食べ物が多い⁽⁹⁾。面白いことに、「あたし」やトウルが食べた食べ物、「卵焼き」や「キュウリの古漬け」、「パン」といったお惣菜、或いは日常的な食べ物である。一方で音楽家が「あたし」にご馳走してくれたり、女の人の口から出た食べ物の名前は、「生牡蠣」や「マロンスフレ」、「いんげん豆と鹿のパテ」などである。「スフレ」や「パテ」はフランス料理であり、それらは「高級」で「食文化」と称されたりする。「あたし」と音楽家を食べ物で表すと、お惣菜とフランス料理である。それは、二人の「社会的ポ

ジション」を意味している。

5 隠喩としての女と家と犬

さて、ここまでは、「あたし」と音楽家の関係を中心に分析してきた。最後に、女の人、音楽家の家、音楽家の犬の意味について、一言触れたい。

「女の人、音楽家の家、音楽家の犬は、彼の^{ダブルスタンダード}「二重基準」の隠喩だと推測出来る。音楽家は「あたし」を、いつでも好きな時に呼び出していた。けれども「あたし」から音楽家を求めのは、決して許されない。

ここでは推測にとどめ、「分析」は次の機会に譲りたい。

おわりに

「あたし」は何かを求めている故に、彷徨している。

「あたし」にとって音楽家は、優しく、豊かで、夢のある存在だった。「あたし」の現実生活が音楽家と乖離していたからこそ、「あたし」は「音楽家」を

求めたのかもしれない。だが、求めていたものは手に入らなかった。それでも「あたし」は、何かを求め続けるだろう。涙が乾いた後に、新たな彷徨が始まる。

註

- (1) 村上龍「あとがき」『トパーズ』角川文庫、一九九一年) 二二二頁
- (2) 斉藤美奈子『売春小説』の構造を読み解く』『売春するニッポン』、一九九五年、宝島社) 一九二頁
- (3) 「分析批評」とは、作者の伝記や作品の成立事情については無視するか、或いは参考程度にとどめ、本文の表現を徹底的に分析して批評する方法である。表現分析によって作品を客観的に読むのが可能になり、作品の理解がより深まる。詳しくは、井関義久氏の『「分析批評」の読書技術』を参照されたい。
- (4) 村上龍『トパーズ』(角川文庫、一九九一年) 二四〇―二五五頁
- (5) 前掲書、一二六頁
- (6) 前掲書、一三三頁

- (7) 前掲書、一二七頁
- (8) 井関義久『「分析批評」の読書技術』(明治図書、一九九五年) 九六頁
- (9)

章	イメージ語	パテ	コキール	スフレ	ワイン	キュウリの古漬け	卵焼き	ソーセージ	生牡蠣	マーマレード	パン
1										3	6
2									1		
3											
4					2	1	2	2			
5		1	1	1			4	2			
6											
7											

参考文献

井関義久『「分析批評」の読書技術』(明治図書、一九九五年)

江原由美子編『フェミニズムの主張』（勁草書房、一九九二年）

『性の商品化』（勁草書房、一九九五年）

小倉千加子『セックス神話解体新書―性現象の深層を衝く』（学陽書房、一九八八年）

別冊宝島編集部『別冊宝島二二四号 売春するニッポン』（宝島社、一九九五年）

村上龍『トパーズ』（角川文庫、一九九一年）

森崎和江『買春王国の女たち―娼婦と産婦による近代史』（宝島社、一九九三年）

上野千鶴子『セックスというお仕事』の困惑―商業化が進む中での人権』（朝日新聞夕刊、六月二二日、一九九四年）